

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（琉球大学農学部植物病理学研究室）

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017131

琉球大学農学部植物病理学研究室

植物病理学研究室は、平成3年度に実施された改組に伴い、生物生産学科、熱帯植物生産講座に組み込まれたため、現在、組織としては大学院にその名称が残るのみある。さらに来年度からはこれも新組織に改編されるため、今後、開学以来連綿として受け継がれてきた栄えある名称がいつまで残るかはわからない。

しかしこの度、沖縄農業研究会においては、新組織ではなく、あえて旧組織としての研究室の紹介との要望があり、これは大学の改組と関係なく、一般社会および現場ではこれまで長い間倍い、親しんできた旧組織の方が色々な面で都合が良いことによるためと推察され、深甚なる敬意を表したい。

本研究室は琉球大学の開学時(1950年)、農学科の中で島袋俊一教授(第5代学長)によって開かれた生物学が前身であり、現在は3人のメンバーで構成されている。生物はそれぞれ寿命があり、短いもので細菌類のわずか数十分程度から、長いものではヤクスギやリュウキュウマツなど数千年に及ぶものまでである。しかし実際の生物は種々の要因によって、可能な寿命を全うしえず死んでいくものが殆どである。その要因のなかの一つに病原体による感染症がある。植物病の病原体となる主なものは糸状菌(かび)、細菌およびウイルスであり農業を行う場合、植物病を如何に効率よく防いでいくかが大きな課題となっている。本研究室では特に国内でも唯一亜熱帯に位置する本県の特徴を把握し、各自が独自の研究・教育を行っている。現在各自が取り組んでいる研究課題は次のとおりである。

田盛正雄教授は糸状菌による病害(その中でも特に藻菌類)が専門で、1)本県に分布するPhytophthora属およびPytium属菌の種類と分布、および生態的研

究、2)土壌伝染性植物病原菌と作物との関係などを主なテーマとするほか、現在では本県で栽培されている熱帯有用作物の病気の資料が殆どないことから、これらの作物の病害目録の作成に心血を注いでいる。

与那覇哲義教授はウイルス病が専門で、これまで、多くの亜熱帯有用作物から種々のウイルスを分離し、その同定を行ってきた、1)パパイヤ奇形モザイクの弱毒株を作成し、その干涉作用による防除、2)パッションフルーツのウイルス病に関する研究、3)ジャガイモのウイルス病に関する研究を行っている。

諸見里善一助教授は糸状菌病が専門で、1)植物病原菌の菌核形成など、形態形成の機構、2)土壌伝染病の生物的防除、3)沖縄県に分布する土壌の微生物相などの研究のほか、本県の土壌から抗生物質を産生する有用微生物を分離しその実用性の検討なども行っている。

昨年、日本は近年に例を見ない未曾有の米の凶作に見舞われ、これが我々の社会生活に与えた影響は測り知れないものがある。この原因は低温の直接的影響に加え、これが誘因となり、各種病害、特にいもち病の発生が追いつけをかけたことにあった。にもかかわらず、現在のわが国では国力がものを言い、ひとりの餓死者も出ていない。しかしこれが江戸時代であったなら数百万あるいは数千万人が餓死していたであろうということは想像に難くない。農作物を作るかぎりその病気は必ず発生する。そしてこれに対象とする植物病理学もなくなることはない。たとえ大学の講座名から消えたとしても。

(諸見里 善 一)